様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２２０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２１３０

研究課題名（和文）看護学生の学習バーンアウトと専門職者へのトランジションに関する長期縦断研究

研究課題名（英文）A Longitudinal Study of Nursing Students' Learning Burnout and Transitions to the Profession

研究代表者
熊谷　たまき（KUMAGAI, Tamaki）

国際医療福祉大学・小田原保健医療学部・教授

研究者番号：１０１９５８３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：看護職の離職率の高さと看護師不足は国内外において共通する問題であり、看護者として就業後1年目の低い就業意欲や離職意向の高さは在学期間における学修状況によるといわれている。本研究で実施した調査から、看護大学の入学時の看護専門職の志望の明確さが入学後の学習の取り組みにも影響するといった先行研究の知見を支持する結果が示されたこと、また、職業レディネスと学習上のバーンアウトに関連が認められ、自尊感情と自己統御感、学業援助要請とも関連がみられ、看護基礎教育課程における学習支援の必要性を再認識した。加えて今回の研究では、測定に用いたバーンアウト測定尺度の邦訳版や自己統御感の計量心理学的な検討をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
看護大学生の学習上のバーンアウトに関する過去10年間における国内外の文献レビューした結果では、中途退学とその要因を報告した研究が散見されたのみであった。今回の研究では、中途退学や休学といった学業継続が困難になった帰結の前段階や予兆として学習上のバーンアウト状態を位置付けたことが特徴であった。今回の研究では様々な状況から限定的な調査となったが得られた知見から、学習上のバーンアウトは職業レディネスに関係することや他者への援助要請を自律的に行えるか否か、また個人が有する内的資源である自己統御感も関係するといったことから、基礎教育課程における学生への多角的な支援の必要性が示唆されたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The high turnover rate of nurses and the shortage of nurses are common problems in Japan and abroad. The state of study during the enrolment period influences the desire to work and the intention to leave the nursing profession in the first year after employment as a nurse. The results of the survey conducted in this study support the findings of previous studies that the clarity of the aspirations of the nursing profession at the time of admission also affects learning efforts after admission and that there is a relationship between occupational readiness and learning burnout. Furthermore, a relationship was also found between self-esteem and self-control sense, as well as requests for academic assistance, reaffirming the need for learning support in undergraduate nursing education. In addition, the present study examined the Japanese translation of the burnout scale used to measure burnout, as well as a psychometric study of self-esteem and the sense of self-control.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護学生　バーンアウト

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

看護系大学の学生がストレス症状を呈する割合は理学療法士や作業療法士より高いこと、また学年が進むとストレスが高くなることが国外の研究から報告されている。ストレスは心身の健康状態を低下させ、さらに長期間にわたりストレス状態が続くとバーンアウト状態に至ることは知られるところである。

欧米の先行研究より、看護学生の約 30%の割合で学習バーンアウト‘ study burnout ’がみられ、また入学年次に 30%でみられた学習上のバーンアウトは卒業年次には 41%にまで高まること、さらに学生時に学習上のバーンアウトにあるものは就業意欲が低く、就職１年目の離職意向が高いと報告されており [1)]、基礎教育課程におけるバーンアウト状態は後々わたって就業状況に影響する。

新人看護師の早期離職意向には個人的要因や労働環境要因といった様々な要因が影響するとされているが、バーンアウトも離職意向の誘因の１つである。入職後から経験５年目までの看護師を対象とした追跡調査研究によれば、離職意向に対してバーンアウトは高い予測力をもっていることが明らかにされている [2)]。 わが国においても看護師の早期離職は低くないことから、学生の学習上のバーンアウト状態が早期離職へ及ぼす影響は看過できない課題である。しかし、国内における医療系の大学生を対象にしたバーンアウトに関する研究は医学生の 1 年次と 5 年次の比較や、医学生と薬学生のバーンアウト状態に関する報告が散見されるのみであり、看護学生の学習上のバーンアウトの実態はほとんど明らかになっておらず、加えて学習バーンアウトの長期的影響に関する研究はみられない。

看護の基礎教育課程を修了後、看護職の免許を取得し、看護の専門職者として自立することは、学生から社会人への重要な職業発達である。医療の実践現場で専門職として期待される責任や役割を担っていくためには、より専門的な知識と技術を習得し、実践能力を伸ばし、また職場環境に適応することが求められる。そして個人の成長発達の上でも看護学生から看護専門職者へトランジションが円滑に進むことが望まれる。しかし、新人看護師においては専門知識や実践力の習得レベル以外に、自信喪失、低い自己評価、対人スキルなどが円滑なトランジションの障害となることが指摘されている [3)]。

他学部の大学生を対象とした研究ではあるが自尊感情はバーンアウトと相関関係があること、自尊感情は援助要請に関連することが報告されている [4)]。援助要請は直面した課題の特性や深刻さに応じて適切な支援を他者に求める行動であり、社会で生活する上で必要なソーシャル・スキルの１つである。また援助要請が依存的か自律的かによって自尊感情が異なるといわれている [5)]。学業上における援助要請と学習意欲の源となる職業レディネス、さらに心理資源である統御感と自尊感情、これらの要因と学習バーンアウトとの関連を明らかにすることは、学生のバーンアウト状態の解明に繋がると考えられる。

２．研究の目的

以上より、本研究は看護大学入学後から卒業年次までの学生の学習バーンアウト状態と学年による変化を捉え、学習バーンアウトと自尊感情ならびに職業レディネス、学業援助要請、自己統御感との関係を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)測定尺度の検討について

①バーンアウトの測定

看護学生と看護者におけるバーンアウト状態を捉えるための測定尺度について検討し、今回の研究においても Demerouti,E らが開発した the Oldenburg Burnout Inventory（以下、OLBI）を用いることにした。なお、本調査における有用性を確認するために尺度邦訳版の信頼性と妥当性を再確認した。Oldenburg Burnout Inventory は独語版と英語版があり、独語版の邦訳については 16 項目中１項目に因子帰属がみられなかった。この結果については D. Reis, et al.（2015）が看護師を対象に実施した調査研究で同様の結果を示し、時間的な制約がかかり仕事要求度が高い看護専門職という特異的文脈で解釈された結果であると説明している。独語版のワーディングに関する結果を踏まえて、本研究では英語版の邦訳を学生に援用することにした。

②自己統御感の測定

Togari, T. et al.（2015）が作成したストレス対処資源である統御感の測定尺度 Sense of Mastery Scale（以下、SOM）日本語版自己統御感尺度について、我々が検討した看護師における尺度の信頼性と妥当性に関する分析結果を踏まえて、本研究で SOM5 項目版を用いることをことにした。なお、分析結果は内的整合性と併存妥当性・収束概念妥当性は確認され、因子妥当性も許容範囲にあった。

(2) 看護学生の学習バーンアウトの実態と関連要因についての縦断的調査
①調査対象
教育課程の背景を考慮し、本研究では看護系大学生を調査対象にした。
②上記(1)以外の測定について
職業レディネスは若林ら（1983）の研究を参考に、5つの下位尺度「職業選択への関心」「選択範囲の限定性」「選択の実現性」「選択の主体性」「自己知識の客観性」21 項目について尋ねた。自尊感情は Rosenberg（1965）の日本語版（以下、SE）8 項目を用いた（山本ら、2001）。学業援助要請は先行研究を参考に自律的援助要請と依存的援助要請について質問した。
③調査実施に関して
調査の実施にあたっては、初回は調査票を配布し個別郵送で回収したが、2 回目以降は Covid-19 感染の急拡大により各大学ともに対面授業からオンライン授業に変更になったことに伴い、調査も WEB での実施に変更した。調査方法の変更においては、澁谷ら（2015）によるウェブ調査と郵送調査の比較検討に関する先行研究を参考に、また、三浦（2020）が指摘しているウェブ調査の問題点の一つである「参加者の努力の最小限化傾向」の影響についても検討し、研究倫理審査の変更手続きは質問内容の変更はせずに調査方法の変更のみとした。

４．研究成果
看護学生の学習バーンアウトの実態と関連要因の調査について、看護系大学 6 機関から調査協力の承諾が得られ学生を対象に調査を実施した。初回調査は看護大学 2 年生を対象に 2020 年 1 月から 3 月に実施し、得られた回答の分析結果は、Oldenburg Burnout Inventory 得点と職業レディネス、自尊感情、自己統御感のピアソン積率相関係数は順に、-.346 (p <.01)、-.558 (p <.001)、-.529 (p <.001)であった。分析の結果、学習上のバーンアウトは職業レディネスと中程度の負の相関がみられ、自尊感情と自己統御感とは高い負の相関関係にあった。翌 2021 年に 3 年次生を対象に実施した調査回答の分析結果については、OLBI 得点と相関関係をみたピアソン積率相関係数は、職業レディネス -.376（p <.01)、自尊感情 -.326（p <.05)、自己統御感 -.359（p<.01）であった。学業上の援助要請は 2 年次・3 年次の順に、自律的援助要請 -.263（p<.05)・ -.028、依存的援助要請 .165・ -.047 であった。学業援助要請では 2 年次で学習上のバーンアウトで弱い関係がみられた。2 年次と 3 年次で同様に職業レディネスの低いほど学習バーンアウトが低い傾向がみられた結果について、我々の先行研究において入学時に看護専門職の志望が明確なほど入学後の学習バーンアウトが低い傾向がみられたことから、職業レディネスと学習上のバーンアウトの関連については同様の結果が示されたと考えられる。今回は入学時の看護専門職の志望と入学後の職業レディネスの関連については把握できていないが、これらに関連があるとするならば、入学後の低学年から看護専門職としての将来のキャリアビジョンを明確にもてるような働きかけや支援が必要である。学習上のバーンアウトに対し学業援助要請は学年によりやや異なる傾向がみられたことは、3 年次はカリキュラム上臨地実習を経ていることによると推察される。本調査については、初回調査の回収率が低く、2 回目の調査ではさらに協力を得ることが難しい結果となった。調査の実施状況について研究者間で検討を重ね、調査は無記名による質問票調査であるが学習上のバーンアウトという学生にとっては回答が躊躇われる内容であった可能性があること、さらに、Covid-19 感染の急拡大の状況下での調査となり学生が置かれた学習環境の変化やその影響があったことなどを考慮し、再調査を実施することにした。今回の調査で得られた結果について、今後、さらに対象を広げ検証する必要がある。ついては、再度学生の学習上のバーンアウトと関連要因に関するスコーピング・レビューを行い研究動向の把握と研究課題を確認し、また、Oldenburg Burnout Inventory に関しては Demerouti, E らが開発した 16 項目版から短縮版 10 項目が開発されるなど、近々の海外の研究知見も踏まえ現在も調査研究に継続して取り組んでいる。Oldenburg Burnout Inventory 短縮版については本年度、看護の関連学会で報告する予定で計量心理学的な解析を進めているところである。

文献

1) Rudman A., et. al.: Burnout during nursing education predicts lower occupational preparedness and future clinical performance, International Journal of Nursing Studies, 49, 988-1001,2012.
2) Rudman A., et. al.: A prospective of nurses’ intention to leave the profession during their first five years of practice in Sweden, International Journal of Nursing Studies, 51, 612-624, 2014.
3) Sato T, et al.: The psychological stress and burnout of medical students in clinical clerkship, Japan Journal General Hospital Psychiatry, 12, 126-134, 2000.Duchscher, J.B., et. al.: A Process of Becoming: The Stages of New Nursing Graduate Professional Role Transition, the Journal of Continuing Education in Nursing, 39, 441-450, 2008.
4) 舘野泰一，中原淳，他：アクティブトランジション，三省堂，東京，2016.
5) Demerouti, E., Bakker, A.B., Vardakou, I., Kantas, A.: The convergent validity of two burnout instruments: a multitrait multimethod analysis. European Journal of Psychological Assessment 18, 296-307, 2002.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 熊谷たまき，小竹久実子，藤村一美，三宮有里，上野恭子	４．巻 17
２．論文標題 the Oldenburg Burnout Inventory : German version邦訳の信頼性と妥当性の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪市立大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20210315-005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊谷たまき，小竹久実子，藤村一美	４．巻 15
２．論文標題 看護師における特性的自己効力感尺度の方法因子を用いた因子構成の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪市立大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20190327-005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊谷たまき、小竹久実子、藤村一美	４．巻 14
２．論文標題 看護師における日本語版統御感尺度の信頼性と妥当性の検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大阪市立大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20180403-006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 熊谷たまき、藤村一美
２．発表標題 看護学生における職業レディネスと関連要因の検討 ―2年次生を対象に実施した初回調査における―
３．学会等名 第86回日本健康学会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤村一美，熊谷たまき，大河内彩子，木嶋彩乃
２．発表標題 看護大学生の学習上のバーンアウトと日常生活ストレス，ストレス対処能力，社会的支援との関連
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 熊谷たまき，小竹久実子，藤村一美，三宮有里
２．発表標題 看護系大学低学年生における学習上のバーンアウトと学業的援助要請の関連
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tamaki Kumagai, Kumiko Kotake, Kazumi Fujimura, Yuri Sannomiya
２．発表標題 The Effect of Nurses' Sense of Mastery on Their Burnout and Mental Health
３．学会等名 The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Tamaki Kumagai, Kumiko Kotake, Kazumi Fujimura, Yuri Sannomiya
２．発表標題 The Examination of Reliability and Validity of a Japanese Version of the Oldenburg Burnout Inventory
３．学会等名 The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 熊谷たまき、藤村一美
２．発表標題 看護大学生におけるバーンアウトと看護職に対する関心ならびに社会的支援の関連
３．学会等名 第82回日本健康学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 熊谷たまき、藤村一美
２．発表標題 看護大学生における学習上のバーンアウトと学業援助要請・自己統御感・職業レディネスの関連―2年時と3年時パネル調査から―
３．学会等名 第87回日本健康学会総会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤村　一美 (FUJIMURA Kazumi) (80415504)	愛媛大学・医学系研究科・教授 (16301)	
研究分担者	小竹　久実子 (KOTAKE Kumiko) (90320639)	奈良県立医科大学・医学部・教授 (24601)	
研究分担者	三宮　有里 (SANNOMIYA Yuri) (60621729)	大阪市立大学・大学院看護学研究科・講師 (24402)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	城丸　瑞恵 (SHIROMARU Mizue) (90300053)	札幌医科大学・保健医療学部・教授 (20101)	
連携研究者	伊藤　美樹子 (ITO Mikiko) (80294099)	滋賀医科大学・医学部・教授 (14202)	
連携研究者	岡本　明子 (OKAMOTO Akiko) (40407432)	昭和大学・保健医療学部・教授 (32622)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関